

1 前回のおさらい

- 1) なぜこの講座が必要か 四つの理由
- 2) 教科書での経済と学説史
- 3) 経済学の定義と領域
- 4) 経済学説史の概観 重商主義まで

2 今回の内容

1) 経済学説史続き

スミスの経済学とそのエッセンス 倫理学者か経済学者か
分業、労働価値説、見えざる手、自由放任

古典派経済学

リカードとミル、マルサス

マルクス経済学

『資本論』の世界 労働価値説 労働力の商品化 搾取説

マルクス以降 日本のマルクス経済学（正統派、宇野派、構造改革派、その他）

限界革命の経済学者たち

三つの流れ ジュボンズ、メンガー、ワルラス

新古典派の形成 マーシャル ピグー

2) 現代経済学の動向

新古典派 サムエルソンの新古典派総合とその後継者たち

ケインズとその批判者たち

ネオケインジアン マネタリスト サプライサイダー オーストリアン

第三の流れ

マルクス残党 制度派経済学 進化経済学 行動経済学など

3) 現代経済学の四つの特徴

制度化されている 数理的処理された論文 ノーベル経済学賞 新しい分野が登場

4) 四つの批判と反批判

人間像が一面的 拝金主義 品格がない 格差社会を生み出す

3 本日の議論

- ・経済学史をどこまで教えるか、教えられるか
- ・年次大会の報告とそこから活用できる内容
- ・その他 メンバーからの情報

■次回予定 ミクロ基礎理論、候補 4月16日（土）、30日（土）、5月2日（月）

経済学寺子屋 第2回総括メモ

日時：2016年4月2日（土）14：00～16：30

場所：ネットワーク東京事務所

参加者：新井、杉田、金子、埴、高橋の5名

①前回の簡単な確認から、どこで経済学史を扱うかを議論しました。

扱えて一時間。学説史としては経済史全体のなかでの経済学者の紹介くらいが最大限の扱いということのようです。

埴先生から大きな政府、小さな政府に焦点化させる授業構成から、スミス、ケインズを扱いたいと言う話がありました。結論としては、大きな枠組みとしてはそれでよいのとはなりました。

②スミスの経済学の説明に入りました。

スミスでは、倫理学者であり法学者であり経済学者でもある多面性に注目という結論です。分業、見えざる手、自由放任などの用語に関しても、文脈をわきまえて紹介する必要があります。『国富論』は一見の価値ありです。また、余裕があれば『道徳感情論』も見ておくとよいと思います。

③リカード、ミルなどの古典派経済学、関連でマルサスの概観をしました。

ここでは、やはり教科書での扱いの断片性が問題になりました。

④マルクス経済学に触れました。

エンゲルスとマルクスの違い、労働力の商品化の意味と搾取論との関連なども説明しました。マルクスの現代的な意味にも話題が広がりました。

⑤限界革命三人組を簡単に紹介しました。

イギリス、オーストリア、フランスの違いがあり、同じ限界革命といってもその後の展開や意味合いが違ってくるとの指摘をしました。

⑥マーシャル、ピグーの新古典派について触れました。

新古典派という用語の多面性に注意して使わないといけない(現代の主流派も新古典派)との話をしました。ピグーの厚生経済学は福祉問題、福祉国家を扱うときに思い浮かべる経済学者という指摘をしました。

⑦ケインズの位置づけをしました。

マーシャルの弟子だけれど、新古典派批判をした人、実践的課題を解決するために理論を提示した人という位置を確認しました。

結果として大きな政府に道を開いてしまった(彼自身はコントロールが効くと考えていた)ことも出てきました。ケインズの『一般理論』も一見の価値ありです。理論部分より、ケインズの人柄や考え方が分かる箇所だけでもOKです。

⑧現代経済学はほとんど触れることができませんでした。

とはいえ、理論的に難しいのでトレースが簡単ではないことなので、ケインズ派、反ケインズ派、その他という大きな枠組みで見ておくことが有効とまとめました。

現代の経済につながる経済学史のおさらいと、授業への持ち込み方、教科書の問題(用語の一面性や断片性)などの話ができたとと思います。最後の部分は尻切れとんぼになりましたが、これは必要に応じてどこかで紹介したいと思います。